

子どもが安心して継続的に学習できる 協力体制構築事業

- 地域日本語教室、若者支援団体、高等学校、市役所との連携による -

行政

若者
支援団体

日本語
教室

学校



清水育英会 × 中央共同募金会

経済的困窮や社会的孤立の状態にある子供の
学習と生活を一体的に応援する助成

特定非営利活動法人 にわたりの会

はじめに

この事業に取り組み始めた 2022 年 9 月は コロナ禍のために 子どもの活動がかなり制限されていました。

21 世紀の現代において経済的困窮は、実は「情報不足と人間関係の貧困にある」との考えに基づき、私たちは活動をはじめました。ただでさえ必要な情報が取りにくく、人間関係が限られている外国にルーツを持つ人々や孤立がちな日本人家庭にコロナ禍の影響は本当に大きく出ていました。

コロナ禍で活動が制限される中、にわたりの会は日々公民館で日本語教室を行い、子どもたちの学習支援を行いました。2021 年の 4 月に、かろうじて定時制高校に入学した子どもの一部は日本語力や学力の不足により進級が危ぶまれています。

また、コロナ禍で来日が遅れ、義務教育年限を超えたため、日本で中学校に入れことができなかった若者、ブラジルルーツで、やっと高校を卒業したが、定職に就けず、心療内科に通っている若者も見受けられました。

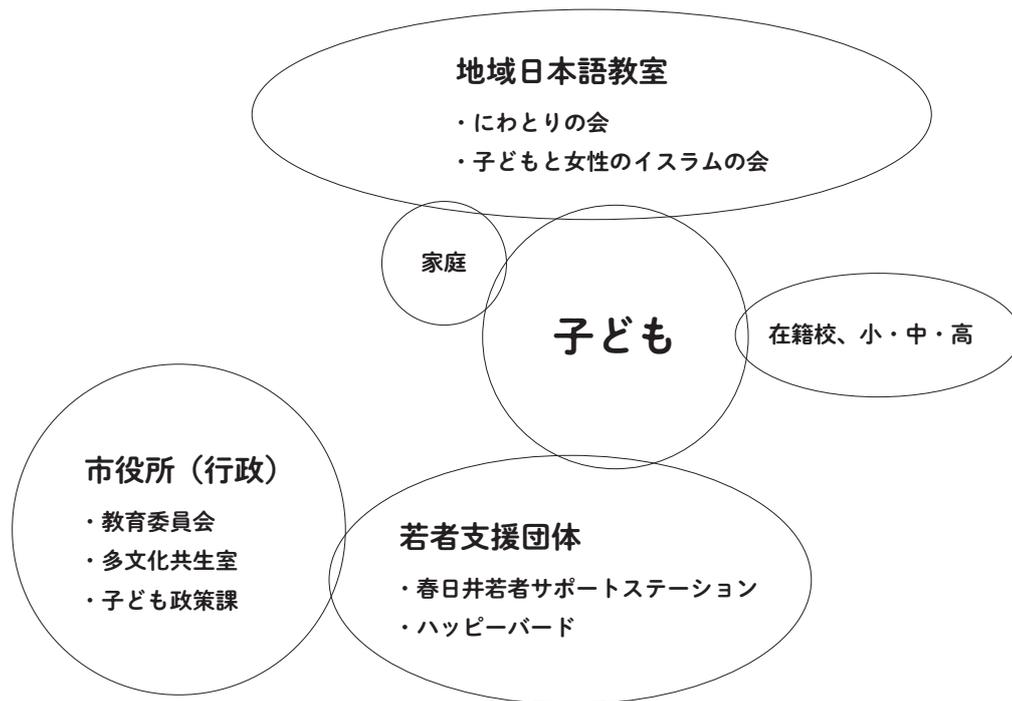
このような子どもや若者を支援する日本語教室や若者支援団体が各所にあります。また、小中学校だけでなく、高等学校や市役所の子ども関連の部署が子どもの幸せのために業務を行っています。しかし、それぞれが独自の業務に時間を取られ、その連携は現在のところ、あまり行われていません。これらが連携すれば、その力が十分に発揮されるのではないかと考え、本事業に取り組むことにしました。

もくじ

1	ネットワークの大切さ	P4
2	にわたりの会の実践	P5
	1 学校の授業内容が理解したい	
	2 高校入試を突破したい	
	3 発達に課題	
	4 高校中退者を出さない	
	5 オンライン上の居場所	
3	アイランゲージスクールの実践	P10
4	ハッピーバードの実践	P12
5	高等学校 教科 日本語 の授業	P15
6	成果と課題	P16

1 ネットワークの大切さ

子どもが安心して学び続けられる学習支援を行う。
それぞれの子が望む人生に向かって歩みだせるように。



子どもが抱える課題

1. 日本語習得が不十分
2. 日本の教育事情や進学事情を親が知らない
3. 学力や発達に課題がある

ネットワークを組むことでできる支援

■情報共有

■子どもの問題の把握し、効果的な支援をする。

- ・日本語の問題
- ・引きこもり傾向。発達障がいの可能性、家庭環境
- ・ビザと就学

■指導支援の実施

- ・日本語能力の向上
- ・社会につながるためのスキル

子どもの願い

1. 学校の授業を理解したい
2. 高校入試を突破したい
3. 高校に入ったならば、
中退せずに、卒業し、進学・就職したい。



2 にわたりの会の実践

2-1 学校の授業を理解したい宿題を出したい

<小学校の子ども>

子どもは担任の先生の出した宿題を行ない、必ず提出したいと思っている。

たいていの場合、宿題は日本語の分かる親の支援を受けて行うという前提のもとに出されています。

そのため、子どもにあまり注力できない家庭や外国人の家庭においては、宿題を子どもに行わせることが困難なことも多いのです。

■よく出る宿題

国語の教科書の音読	親の日本語力が子供よりも高いことが前提
漢字ドリル	ただ写しているだけ 読めない 意味がわからない
算数	ただ計算している 文章題は 苦手 日本語力の問題
書写	道具の 使い方がわからない。宿題で出してもあまり意味がない。

<中学校>

外国人の家庭や孤立しがちな家庭の子どもが学力不振に陥ってしまう原因

小学校の学習内容の理解が不十分

外国からの途中転入生の場合、カリキュラムが違うため、その学習に必要な事項を習っていない。

社会科 国によって 地形も 体制も違う。

■例 ペルーの生徒

「山は寒い。森は暑い。」

日本の標高の高い山は気温が低い。

日本では森と山を切り離し手扱うことはあまりない。

ペルーの生徒にとっては南米のアンデス山脈が山で、熱帯雨林のアマゾンが森。

背景が違うと同じ言葉を使っても全く違うイメージを持っていることが多い。

困難を抱えている子どもの成長を促すには、継続的に、見守る必要がある。

親も子も「なぜ学力不振なのか。」を担当が替わる度に、毎年説明しなくてはならないが、上手く説明することができない。

また、学校では、その子にとっては大きな進歩であっても、全体から見れば小さな進歩で、なかなか成長を認めてもらえない。

外国につながる子ども、国を超えた転校のために学力不振に陥っていて、努力不足によりものではない。

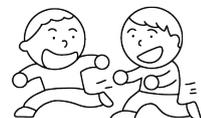
宿題で行き詰ったときにアドバイスをくれる家族もいない。

にわたりの会は子どもの心に寄り添い、

どうしてわからないの？
もう習ったはず。

という言葉は禁句にしています。

心が温まる場所、心地良い場所としての
地域日本語教室の存在がとても重要。



2-2 高校入試を突破したい

<日本語力が不足で学校の授業についていけない>

- ・高校入試を突破するには、授業内容をそのものと日本語の力を共に育てるサポートをしていかななくてはならない。
- ・毎日行われる授業は漢字二字で書かれるような難易度の高い日本語で行われる。
小学校の漢字を短期間で学んだ来日4年目のベトナム人生徒の場合、6年生の段階で、問題なく小学校の授業について行けたが、中学校の授業内容が理解できず、中学校に入った途端とても苦しんでいた。
- ・日本の進学事情について、子どもと親に教えていく必要がある。

■進路希望調査の重要性

定期テストは必ず受けること、提出物を出す
行きたい高等学校を事前に見学すること

<内申点について教える>

通知表の記載されている内容を理解できるようにサポートする。評定を上げていくのに必要なことを知らせる。

- 国語科 多くの外国人の評定は最下位の1。日本語力をつけていくことが最重要。
- 社会科 親によるフォローは全く望めない。定期テストでよい点数がとれない。
- 数学科 母国とのカリキュラムの違う、計算力が低い、国語力の問題で文章題を解くことができない。数学の専門用語が理解できない。
- 理科 コロナ禍で実験・観察をほとんどやってない。
- 英語 問題文が日本語。そのため、何を問われているのか分からない。

このように、困難を抱える生徒が自分の希望する高校に進学できるようにするには、学力補充とともに常に励ましを。

日々の励ましがとても重要です。

学習に必要な日本語を習得するには5年から7年かかると言われています。その間、子どもはとても不安な状態にあります。

休み時間に友達と話すのには何も不自由がない、親よりの日本語が上手なので、銀行や病院などでの通訳を頼まれるのに、なぜ、成績は上がらないのだろう、自分は馬鹿になってしまったのかと。

これらの生徒も時間をかけて、その子に合ったペースで、効率よく支援していくことで、日本語力がアップし、中学3年生の受験期には、かなり学力がついてきます。ここに至るまでに、心が折れないようにサポートすることが大切です。

中3時点で、行きたい高校のレベルと実際の成績のギャップがあっても、高校生の内にさらに日本語力がつき、その後思うような進路を取ることも可能であるということも十分に伝える必要があります。

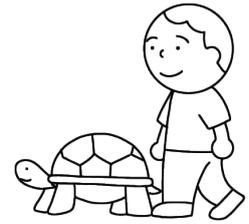
日本人で困難を抱える子ども、例えば、ヤングケアラーについても、普通ならば親からの励ましによって、目の前の困難を乗り越えられるが、それが不足しているのが現状です。

日々の十分な励ましが彼らの学力保持に欠かせません。

2-3 発達に課題

ゆっくり教えても

日本語で教えても 母語で通訳しながら教えても、なかなか学習が進まない。



このような場合は、言語の問題ではなく、発達障がい可能性があります。

地域日本語教室や子どもの居場所に定期的に来ることで、障害の有無に早い段階で気づくことができます。そして、各団体のネットワーク化が進んでいけば、その得意分野を生かし、相乗効果を生むこともできます。

また、日本語教室のインクルーシブ的な学びの場にいることで、障がいのある子どもだけでなく、ほかの子どもにとっても有意義な体験ができるのです。

■にわたりの会にやってきた個性的な発達の子どもたち

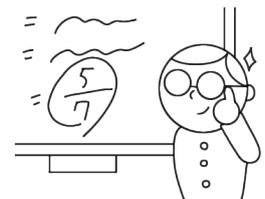
Aさん

数学は得意。でも、日本語が上達しても、一部の支援者以外とはなかなか人間関係が結ばれません。気が向かないと廊下に寝そべってしまいます。コミュニケーション力に問題があるようでした。

通訳と共に専門医のいる病院にいきました。そこで分かったのは、数回通院していたのも関わらず、途中で通院を辞めてしまったこと。親が頼んだ通訳には、たくさんの謝礼を払わなくてはいけなくて、通院を辞めてしまったとのこと。

その後は、にわたりの会の通訳と共に通院することとなりました。

進学先の選定に関しても、通訳と共に高校の体験会に行くことになりました。



Bさん

Bさんはダウン症で、以前住んでいた町では、近所や学校の理解に支えられて生活していました。しかし、6年生のときに転校し、それが途切れてしまいました。市役所で相談し、にわたりの会に来ることになりました。

半年弱で、中学校に入学する時期が来たので、入学式に付き添い、Jくんの特性を伝えてきました。

その後、弊会の補習的な学習支援を受けていましたが、放課後デイサービスのサービスを受けることになりました。

■外国人と発達に関するシンポジウムに参加

発達障がいについての研究は日進月歩なので、このような会に参加し、最新の情報をスペシャリストから入手しています。そこで得た情報を支援者や親にわかりやすく伝えといったこともしています。

2-4 高校生への支援、高校中退者について

<高校入学説明会 - 小牧高等学校定時制 - に協力>

日本語教室で支援した外国につながる子どもたちが無事、高校に入学しました。

高校の方からも入学当初退出しなければならない書類の書き方などを哲多ってほしいとの協力要請がありました。

入学当初に事務手続きで、つまづかせないために、入学説明会の運営を手伝いました。

親も子ども喜びと不安が交錯しているこのときに援助ができ、人間関係を深めることができました。

<高校の教科としての日本語>

授業を受けている生徒

- ・日本生まれまたは、7、8年日本で生活し日本の小中学校小中学校に通っている生徒
- ・来日2年ぐらいの生徒
- ・母国で中学校卒業の学力を充分につけている生徒
- ・短期間にかなりの日本語力を付けた生徒

以前は外国人に対する支援が少なく、一学期に退学する生徒がたくさんいましたが、今年度はまだ退学者はゼロです。

卒業までに、大学や専門学校に進学するための学力や日本語力はまだ十分ではないので、今後も支え続けることが欠かせません。

(詳しくは5章で)

医学部志望者には、日本の医学部進学には、高い学力と多額の学費がいることを早めに知らせました。

高校卒業時点で一度帰国し、その国の国費で医学部進学することもできると伝えました。

<すでに中退してしまった若者への対応>

- ・若者支援団体ハッピーバードのカウンセラーのカウンセリングを受け、本人の希望を明確にしました。
- ・春日井若者サポートセンターに行き 高卒認定試験の情報をもらい、必要な単位を取るために学習支援を行いました。
しかし、本人や家庭の事情で継続することが難しく、受験には至りませんでした。

高校入学直後から支援をし、中退させないことがこのような事態を防ぐことが一番大切なことと考えます。



2-5 オンラインでの居場所 - 近くに日本語教室がない、遠くて、通えない -

日本語教育を必要としている子どもは各所に点在しています。

その子どもたちには、オンライン上の指導も必要です。オンラインの教室も大事な子どもの居場所といえます。

<名古屋 在住の中学生>

小牧市の学習場所に通えない。電車でも片道一時間かかる子どもいます。

本人の希望により、来日直後は毎日オンライン学習で日本語を教えました。

半年たった現在、週3回のオンライン学習をしています。

オンライン授業だけでは解決しないときは、家庭に訪問して、支援しました。

また、在籍校との連携をはかり、親にも日本の教育事情を丁寧に教えています。



<名古屋市在住 小中学生 ウクライナ 避難民>

岡崎市、名古屋市に小牧市に通えない子どもがいます。

オンライン上の支援者も東京在住です。にわとりの会がオンライン授業のやり方を支援者に伝えています。

オンライン上の授業でも、にわとり式漢字カードやアプリを使って半年間で小学1, 2年生の漢字を教えることができました。

通訳が名古屋市在住、フランス滞在中であったりしても、継続して学習することができています。

この生徒たちに日本語の基礎的な文法と漢字を教えたところ、教科書を読み、在籍クラスの授業内容が徐々に聞き取れるようになっていきます。

この活動は、ウクライナ文化協会と連携しています。

いろいろな団体との協力が子どもを助けるために重要であることを痛感しました。

4 アイランゲージスクールの実践

場所：名古屋市港区善進町

外国にルーツを持つ子供たちの学校の教科学習を中心とする支援

外観



内観



4月～3月

ボランティアや大学生・高校生と一緒に、
学校の教科に沿った算数や国語を中心に勉強をします。



8月

夏休みの生活や宿題を中心に、工作や習字もしました。

- ・理科実験教室 レモン電池を作ろう
- ・自分の指紋を見てみよう。



9月

読書の習慣をつけるために、みんなで本を買いに行きました。



10月

ハロウィンパーティー

流しそうめん 体験



参加者の年齢 : 小学1年・4年・5年・中学1年・2年・3年・夜間高校生

参加者の国籍 : スリランカ・パキスタン・ヨルダン・ミャンマー・中国など

毎週火曜日(月4回) 18~20時

- ・学校の教科を中心に、国語・数学(算数)・英語・音読などのお手伝いをしています。
- ・未就学児・学年の小さな子供たちや来日間もない子供たちには、ひらがなカタカナの認識とパズル、タブレットなどで読み方と書き方を学び、簡単な文章問題を練習します。
- ・早い段階から九九の暗唱や毎回のレッスンの前に、暗唱を習慣づけるなどして、家庭では母語しか話さない子どもたちに、日本語を話す機会をなるべく多く与えるようにしています。
- ・学年の高い子供やできるようになった子供が、できない子供を手伝いボランティアの足りないところを補います。
- ・漢字カードやカルタ・文字合わせのカードを使って視覚と音・感覚を使って学びます。
- ・小学生高学年、中学生からは、その子のレベルにあった算数・数学の問題の履修と国語や理科社会の単語を取り入れるために、絵本や漫画を活用しています。
- ・外国にルーツを持つ子供たちが日本の生活をより深く理解できるように季節の行事も取り入れています。
- ・現在は、キャリア支援教育も始め、子供たちのなりたい職業の中からいくつかを選び、職業体験事業にも取り組んでいます。

5 ハッピーバードの実践

<活動について>

日付	活動内容
2022年10月4日 11日 18日	10月のプログラム活動： ①LINE スタンプの企画会議 ②自分自身の状態を把握して伝える
11月1日 3日 8日 15日	バンブークラフトマルシェの準備・打合せ バンブークラフトマルシェ出店 11月のプログラム活動： LINE スタンプの企画会議
12月6日 13日 20日	12月のプログラム活動： ①自分の得意を把握しよう ②自分の苦手を把握しよう→工夫を考える
2023年1月10日 17日 24日	1月のプログラム活動： ①苦手への対処の仕方を考えよう ②リラックスできる方法を考えよう
2月7日 14日 21日	2月のプログラム活動： ①グルグル思考の特徴を知ろう ②考え-気持ち-行動の考え方を学ぼう
3月7日 14日 21日	3月のプログラム活動： ①トマトの芽出し作業を体験しよう ②遠足の計画を考えよう
4月4日 11日 18日 22日	4月のプログラム活動： ①遠足の計画を立てよう ②怒りのコントロールについて学ぼう 遠足：成田山→城下町→河原の公園
5月9日 16日 23日 28日	5月のプログラム活動： ①LINE スタンプの企画会議 ②アート傘作り、マルシェの準備、打合せ クラフトマルシェへの出店
6月6日 13日 20日	6月のプログラム活動： ①クラフトマルシェの振り返り ②自立について考えてみよう
7月4日 11日	7月のプログラム活動： ①自己紹介、情報交換の仕方

18日	②深く知らない人とのコミュニケーション
8月1日	8月のプログラム活動
8日	①テンションコントロールを学ぼう
22日	②周りが見えなくなる「罨」を考えよう
9月5日	9月のプログラム活動：
12日	クラフトマルシェ・ワークショップの打合せ

バンブークラフトマルシェ



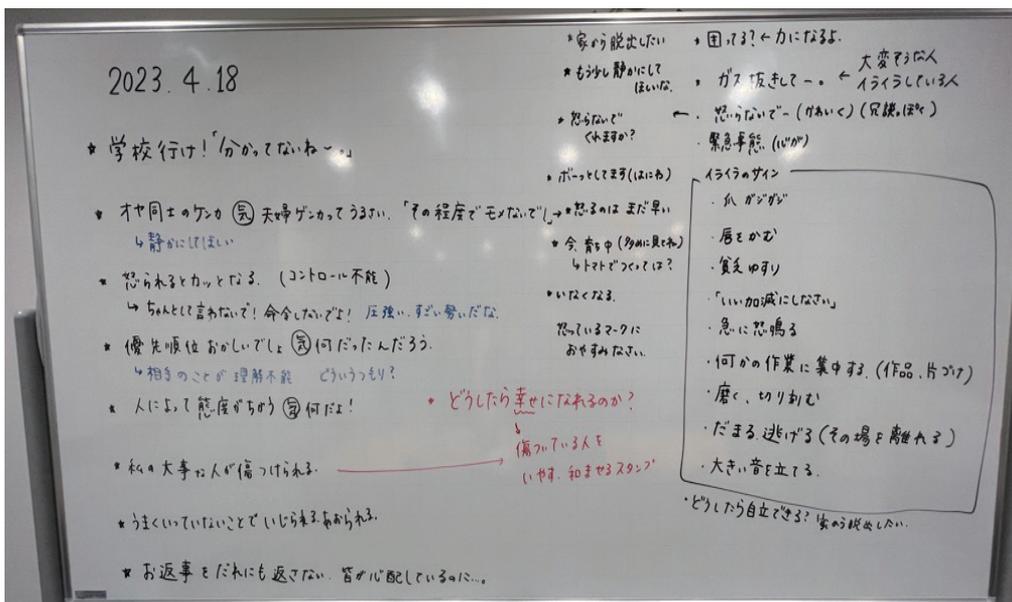
トマトの芽出し、植え付け



犬山遠足



プログラムの板書



<成果>

- ・ハッピーバードでは、「プログラム活動」、「マルシェの活動」、「LINE スタンプ企画」、「余暇活動」の4つの活動を行いました。
- ・「プログラム」は月に3回、参加者の課題に合わせ、社会に繋がるために必要なスキルの学習、他者に援助希求をしたり、自分の特徴を説明したりするのに必要な自分自身の振り返りを行いました。その中で、それぞれの参加者が自分自身の特徴に気づき、言及し、自分に合わせた工夫の仕方について考えることができました。
- ・「マルシェでの活動」は、自分が作った作品を褒めてもらい、作品を購入してもらえることによって、認められたという感覚を得て、自己効力感を高めることができました。また、販売に携わった参加者は、お金のやり取りやお客さんへの呼びかけを通して、働くことの楽しさや充実感を味わうことができました。
- ・「LINE スタンプ」の企画を通して、自分自身のネガティブな感情に向き合い、それを表現する術としてこんなスタンプがあるといいのという意見を出し合って話し合いをすることができました。また、イラストが得意なメンバーがスタンプ画像を作成し、販売を行うなど、社会との繋がりを実感しながら活動を行うことができました。
- ・「余暇活動」として、遠足を企画、実施しました。みんなにとって無理のない活動になるには、どうすると良いのかを考えながら遠足の計画を立てました。楽しみな活動のために、話し合いをしたり、必要な情報を検索し、時間などの見通しを考えたりすることができました。

<課題>

- ・苦手さが大きい参加者同士がお互いの行動で刺激を受けすぎてしまい、調子を崩すことがありました。継続参加が平易になるように、環境調整や支援者によるさらなる配慮が必要であると考えられます。
- ・参加者のニーズがそれぞれ大きく異なるため、参加者のニーズが満たされるようにさまざまな活動のメニューを準備し、今後の活動において、広いニーズに対応できるようにしていく必要があると考えられます。
- ・居場所や社会との繋がりを求めているものの、対人恐怖が強く、なかなかグループでの活動に参加できない参加者もいました。グループでの場を用意しても、参加したい意欲はあるものの、参加できずに落ち込んでしまう参加者がいました。グループだけの活動ではなく、支援者との関係づくりから始め、じっくりと少しずつグループに繋げ、本人のできる形で社会との接点を持つようにすることが必要です。そのための資源の整備と支援方法の調整を活動を通し、確立していきます。
- ・マルシェなど社会に繋がる活動では、参加者のできることに社会が求めていることのギャップが大きいです。参加者が疲弊していたり、社会とのやり取りでズレが生じてしまったりする場面が見られました。参加者が繋がっていく社会に対しても、支援者が丁寧に説明をしたり、大きすぎるつまずきにならないようにするためのサポートをしたりしていきます。

5 高等学校 教科日本語の授業

■ 4月

自己紹介、出身国、好きなことを話す。

です、ます 助動詞の混同がある。

<活動>

- ①短い文章を読み、動詞と形容詞を理解する。フラッシュカード
- ②日記を書く

■ 5月

ます形 ます、ません、ませんか、ましょう

助詞に 時間に 目的に 目的

地に (へ)

動詞 います あります

<活動>

- ①友達を誘う、誘いを受ける または断る。(理由を言う)
- ②情報を加えて誘う。きぼう

■ 6月

比べる、どちらが、どれが一番

助詞 がNが好きです。Nのほうが□です。

助詞 で 範囲、手段、場所

<活動>

- ①友達の意向を聞く
- ②情報を比べて相談する
- ③誘う 答える はい いいえ (理由を言う)

■ 7月

希望を伝える 依頼する 許可を求める 禁止

動詞+たいです。

動詞て形+ください。 +もいいですか。 +はいけません。

動詞ない形+て

<活動>

- ①友達の意向を聞く
- ②情報を比べて相談する
- ③誘う 答える はい いいえ (理由を言う)

■ 9月

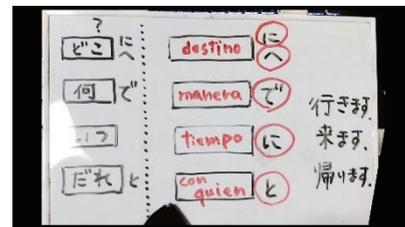
教科で使う日本語

日本語能力検定 4, 3, 2 級受験の学習

評価と課題

4月、日本語を話す機会が圧倒的に少ないため、学習した日本語の定着が難しく、文字を読みながら小声で発話している様子でした。支援者を交えたグループ学習を通じ、何度も声に出して言う、聞く練習を繰り返した結果、上記の会話では、会話中に笑顔が見られ、他者の会話も理解し、前向きな姿勢で聞いている様子が伺えました。また「高校はどうか。」の問いかけに「楽しいです」と答えてくれました。

今後の学習では、既習の文型も含めた会話で、基礎固めを図り、JIPT試験に向けた学習も必要です。



	共通テーマ	初級
1	出会い	はじめまして
2	消費生活	買い物・食事
3	計画	スケジュール
4	私がいるところ	私の国・町
5	できごと	休みの日
6	外に出る	一緒に!
7	交流	友達の家で
8	想い	大切な人
9	趣味・余暇	好きなこと
10	旅	バスツアー
11	ライフ	私の生活
12	健康	病気・けが
13	影響	私のおすすめ
14	文化	国の習慣
15	メディアと暮らし	テレビ・雑誌から
16	教育	
17	仕事	
18	環境	
19	科学	
20	豊かさ	



6 今回の事業のまとめ

■成果

<市役所との連携>

- ・定住する予定だが、当初ツーリストビザで来日したため、なかなか小学校中学校に入学できない子どもの支援をにわたりの会で行うことができた。2名
- ・義務教育相当年齢を過ぎた子どもの支援をすることができた。2名

<アイランゲージスクール、ウクライナ文化協会との連携>

- ・中学校の授業についていけない子どもの支援ができた。15人
- ・通えない子どもはオンラインで指導した。7名
- ・進学先の高校 どう選ぶかについて外国人の保護者に情報を伝えることができた。多数
- ・外国人の保護者に日本の教育についての情報を伝えた。多数
- ・小学校の授業についていけない子どもの支援ができた。55人

<ハッピーバードとの連携>

- ・発達に課題がある子どもの支援ができた。

<小牧高校 定時制 との連携>

- ・定時制高校の入学説明会で手続きの手伝いができた。
- ・高校 教科日本語授業への教材提供。高校入学以前の情報の共有。教科日本語を受講している人数は11名
- ・放課後に日本語教室で補習ができた。3名

<ハッピーバード、春日井 若者サポートステーションとの連携>

- ・高校中退をして 将来について悩んでいる若者の支援ができた。1名

<市役所との連携 ハッピーバード 市役所との連携>

- ・母国で高校を卒業したが引き続き勉強を続けたい若者の相談に乗った。1名



■課題

- ・ツーリストビザで入国した子どもが学校に正式に在籍することができるまでに半年近くかかりました。今回関わった子どもの親は、子どもが学校に行っていない期間が長くなり、どうしたらいいかわからなくて、放置している期間が6ヶ月に渡っていました。保護者に学校に通うことの重要性をしっかりと伝え、市役所に定住ビザを持っていない子どもでも、学校や子ども支援団体で、学習機会を提供したいと強く感じました。
- ・今回出会った高校中退した若者は、中学卒業直後に高校入学準備の学習の場を探していました。このことを子ども支援団体はできるだけ早く掴み、支援する必要があると思いました。そのために、近隣中学校との連携を今後さらに密にすることが重要です。
- ・高校中退する前に、にわたりの会など子どもの支援団体と関係ができることが一番望ましい。が、今回は事態がかなりこじれた若者に会いました。このようなことを防ぐには、いろいろな高校と連携し、中退しそうな生徒の把握、応援を積極的に進めることが必要だと感じました。

終わりに

今回の事業を通して、家庭や学校以外の居場所が子どもにあることはその精神安定にとっても役立つと改めて確認できました。子どもの「成長したい!」という思いを受け止め、その実現をこれからも支援していきたいです。

適切な学習支援を行えば、子どもたちに学力をつけること、自信をつけることができます。

子どもは日本語教室や支援団体に通いたいが、保護者の送り迎えできないことが多いのが現状です。継続して居場所に通うことができるような方法(拠点を増やす、オンラインで結ぶ、送迎を行うなど)を考えなければいけないと思いました。

いろいろ困難はありますが、これからも各団体との連携を深めていきます。そして、行政機関や学校が提供したくても提供できないきめこまやかなサービスを提供し、子どもが学校に通いやすいように行政や学校と連携して、困難な状況にある子どもたちを引き続き応援していきます。

